

# 宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象

下地, 賀代子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

琉球の方言 / 琉球の方言

(巻 / Volume)

28

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

113

(発行年 / Year)

2004-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00012552>

# 宮古多良間方言の音韻及びその変化の現象

下地 賀代子

## はじめに

多良間島は宮古島と石垣島のほぼ中間に位置する、面積約20km<sup>2</sup>の小島である。島の大部分は緑地であり、農作物や家屋を守るフクギ並木が大変美しい。1400名余り(平成15年5月31日現在)の島民は、島の北側に位置する1つの集落内で生活している。行政区分上、この多良間島とその北方約12kmのところにある水納島とを合わせて多良間村と称し、主島である多良間島は村落の中央を走る境界線道路の西と東とで、それぞれ仲筋(方言ではナカスズ[nakasuzi])と塩川(方言ではシュガー[fuga:])の2字に分かれる。水納島は水納字となり、今は1世帯が生活しているのみである。現在、多良間島と水納島との交流は少ないようだが、仲筋、塩川のそれぞれに暮らす人々の触れ合いは日常茶飯事であり、言語コミュニケーション上の問題は全く無いと言っても過言ではない。

この多良間島の仲筋と塩川及び水納島で話されていることばの総称が、「多良間方言」である。先学の研究によって、南琉球方言内の宮古方言に属するという考え方が主流となっている観があるが、八重山方言との類似点も多くみられることから、上の位置付けに疑問を呈し、同方言の八重山方言への所属を主張する研究者もいる<sup>(1)</sup>。(その是非の具体的な検討は別稿に譲るものとして、ここでは慣例に従って「宮古多良間方言」と称している。)

本研究の目的は「多良間方言」の音韻現象についての記述であるが、先述の理由により、水納(島)は含めていない。また塩川と仲筋について、両地域の方言は語彙レベルにおける音韻的な対立が見られるものの<sup>(2)</sup>、混同が多く、また文法体系においてはほとんど差異は見られない。よって本稿では両者を区別することなく、「多良間方言」(以下単に多良間方言)として総括的に扱っている<sup>(3)</sup>。

ここで用いられている資料は主に、1999年8月から2000年10月にかけておこなった基礎語彙調査によっている。主なインフォーマントは下地竹(故)である<sup>(4)</sup>。

## 1. 音韻体系

まず、多良間方言の音韻体系を示していく。

### 1-1 音素

(1)母音音素 A.短母音音素/i, i̥, a, u, (e), (o)/[4(6)]

B.長母音音素/i:, e:, i̥:, a:, u:, o:, ë:, ü:/[8]

Aの短母音音素について、中舌狭母音/i/<sup>(6)</sup>は多く摩擦音を伴い、その存在は宮古方言に特徴的なものである。また/e/と/o/は、e>i, o>uというこの方言の音韻対応によって、その出現が極めて少数である。他の四つと比べてもその劣勢は明らかではあるが、いわゆる共通語(以下単に共通語)の影響によって使用が増えつつある等の理由により、()に入れて暫定的に認めている。特に/e/は、[ba:re](おりこう{\*子供に対して用いる})、[mmepi](もつと)、[mme](もう)などのように、共通語に由来しない、多良間方言の日常語彙の中にもいくつか観察される音であることから、/o/よりも音韻として認められやすいように思われる。だが、共通語由来の語を除いて語頭には立たないことから、示すならばやはり()に入れるべきであろう。

Bの長母音音素は、短母音音素をもととしつつ、その「音声器官の状態を維持することで行く」(長浜1978:1)。つまり、これらは短母音の連続として認められる性質を有するものではなく、[a:m](あくび)と[am](綱)のような最小対立を示すことから、1つの分節的な単位として機能していると言える。また、その「(音を)伸ばす」という特徴のみを切り出し、長音記号などを用いて分析的に捉えてしまうと、それぞれの「長音」に見られる音響的な違いを捨象してしまうこととなり、適切ではない。

/e:/と/o:/は、以下に示す連母音の融合現象によって現れるものが大半であると考えられる。だが後者について、仲筋では[au]の融合が起こらず、塩川の[o:]と語彙的な対立を示している(注2参照)。また[ai]と[ae]について、その他の連母音が仲筋([au]を除く)、塩川ともに長母音化して現れる場合が主であるのに対し、この2種の連母音ではむしろ非長母音化が優勢である。まず[ai]は、例えば[kaiku](蚕)、[dai](値段{\*代})、[taigai](大体{\*大概})、[unigai](お願い)<sup>(6)</sup>などのように、特に名詞の語彙レベルでの長母音化は稀である。[ai]の融合現象は、例えば共通語のカイ(買)、ツカイ(使)にそれぞれ対応する強変化動詞のいわゆる連用形が[ke:]、[tsuke:]のように現れるなど、主に動詞の形態レベルにおいて生じると考えられる。また形容詞[ne:ŋ](無い)、助数詞[pituke:](1回)も、原則的に長母音化して現れる。[ae]について、音韻対応による[ai]と、そこからさらに長母音化した[e:]のいずれも現れる。だがその出現頻度からは[ai]が優勢であり、特に弱変化動詞及びそれに準じる形式、また[kaisi](返す)のように対応する弱変化動詞([kail]返る<sup>(7)</sup>)を持つ強変化動詞では、その活用形のいずれにも融合現象は生じていない。なお例外として、カンガエルに対応する語に[kanɡail]と[kanɡe:M]の2型見られるが、後者は「気遣う」というニュアンスを伴っており、両者のその語彙的意味には若干の差異が見られる。またその基本となる形式も異なることから、これらは別語として扱われるべきだろう。

e: <ie, ija, {ai, ae} 語例) [ke:ril] (消える) [me:ku] (宮古)

[e:gu] (歌{\*アイゴ}) [me:] (前{\*maiとも})<sup>(8)</sup>

o: <au, ao, owa 語例) [ko:] (買う{\*塩川}) [o:fa:l] (青い) [jo:fa:l] (弱い)

また、/ë:/と/ü:/は、その出現が限定され、助辞が後接した形式の融合形、すなわち文の中での存在形態としてのみ現れる点で特殊である。/ë:/は、末尾音が/i/である語の係助辞/-ja/によるとりたて形式、/ü:/も同様に、末尾音が/i/である語の、対格助辞/-ju/の後接した格形式の融合形である。/ü:/は/ë:/と比較して分析的な形でも現れやすく、やや新しい変化であると思われるが、いずれも次のような最小対立を示し、上記の融合音/e:/と/o:/が認められるのと同じく、1つの音素として認められる。

|                       |                         |
|-----------------------|-------------------------|
| [gagë:] (鉤は{<gagija}) | [takü:] (炊くのを{<takiju}) |
| [kage:] (影は{<kagija}) | [taku:] (蛸を{<takuju})   |

(2) 子音音素 A. 一般子音音素/h, k, g, t, d, c, s, z, r, n, f, v, p, b, m, l/[16]

B. 口蓋音子音音素/j, hj, kj, cj, zj, sj, pj, bj, mj/[9]

C. 唇音子音音素/w/[1]

Aについて、歯茎破裂無声音/t/と歯茎摩擦無声音/c/は相補分布を示さず、別音素として解される。なお/c/には条件異音として[tʃ]が含まれる。また、/z/、/s/にも条件異音[z]と[dʒ]、[ʃ]がそれぞれ含まれる。Bの/kj/以下の音素について、これらは、例えば[k][j]のように分断することのできないものであり、つまり、わたり音的に発されているのではないということから、1つの音素として認められるべきであると考え。そして/j/も含められたこれらの音は、口蓋音という特徴から、口蓋音子音音素としてまとめられる。

(3) 成節子音音素 A. 短子音音素/q, N, M, L/[4]

B. 長子音音素/N:, M:/[2]

成節子音音素は、単独で音節を成し得るという点において(2)の子音音素から区別される。なお、/L/を除く全ての音素が、単独で語頭に立ち得る。

まず/q/について、これは促音を表し、以下に示すようなものが該当する。

[tippu:] (鉄砲) [ffa] (子供) [bikivva] (男の子) [ssaku] (咳) [baʃʃi:l] (忘れている)  
[tsukkari:l] (疲れている) [uttu] (年下<弟、妹>) [baddzi] (なぐる) [tulla] (鶏は)

金田一(1958)は日本語の促音の本質について、口腔内における閉鎖・狭窄の一般、さらにつきつめて閉鎖の持続・狭窄の持続であると述べている(金田一1967:161)。多良間方言においても、「詰める音」がその前に現れる音は、その調音方法においていずれも閉鎖や狭窄を伴うものである。つまり、これらは<閉鎖・狭窄>という音声的特徴によって促音音素/q/に抽象化される。また、[utu] (音)と[uttu] (年下の総称)のように、促音の有無による意味の弁別が行われること、閉鎖・狭窄の持続部が1拍分の長さを保持することも、その音節性の根拠として挙げられる。従って促音音素/q/が認められ、これには[p, f, v, s, ʃ, k, t, d, l]が該当することとなる。このように考える事は、一見、母音音素に長短の別を認めることと矛盾するようである<sup>(9)</sup>。だが、両者の長音部及び閉鎖・狭窄部それぞれに位置する、それぞれの音声の音響的差異の程度は著しく異なっており、またすでに見たように、長母音/e:, ë:, o:, ü:/に対応する短母音/e, ë, o, ü/の出現がない、あるいは稀である。よって両者に同等の抽象の度合いを与える事は、この場合決して適切とは言えない。

/N/は撥音を表し、その調音的な違いから/n/と区別される。すなわち、/n/が舌先でおこなわれる「破裂の鼻音」であるのに対して、/N/は「閉鎖の鼻音」と称されるように、促音/q/同様、その本質は「閉鎖の持続」にある(金田一1967:164)。そしてそれが十分に1拍分の長さを持つことから、撥音音素/N/が認められる。また、[aŋga] (姉)、[baŋki] (吠える)、[aŋ] (私)のように、その出現が後に続く子音やその位置によって条件付けられている軟口蓋鼻音[ŋ]などは、「閉鎖の鼻音」の条件異音として/N/に含まれる。

またこの方言では、[am] (網)、[mni] (胸)、[mta] (土)のように後接する子音やその位置に条件付けられることなく、単独で音節を成し得る[m]が観察される。この[m]は、[aŋ] (餡)-[am] (網)のように撥音の条件異音[ŋ]と互いに意味を弁別する要素となることから、上記の理由で子音音素[m]から区別され、/N/とは別に成節音素/M/として解釈される。だがここで、[mmaga] (孫)、[mbail] (耐える)等、/mV, bV, pV/の音節の前に現れる[m]が問題となる。すなわち、この場合の[m]は/N/の条件異音ではないのかという問いである。だがこの方言では[ʃaninmutsi] (月桃の葉で包んだ餅)のように、/nV/の前に現れる[m]と共に、/mV/の前に現れる[n]も観察される。この語は[ʃaniŋ] (月桃)と[mutsi] (餅)からなる複合名詞であるから、一語となって[m]が後に続きつつも、[ʃaniŋ]の[ŋ] (/N/)が保たれているということである。従って、例えば[im] (海)と[pataraki] (働く<き>)からなる[imbataraki] (漁など海で行なう仕事の総称)の[m]も、両唇音[p(b)]が後に続くという「条件」によって現れたものとは言えず、上記の問いは否定される。だが[mbil] (伸びる)等、共通語との対応から[nu>n>m]という変化が想定される語がある。この場合のみを上と区別して扱うことも考えられるが、[nu(no)>m]という音韻変化(対応)を示すものは今のところごく少数であり<sup>(10)</sup>、既に見

たとおり多良間方言における[m]と[n]の区別は厳密なものであることから、本稿では、但し助辞の後接などの形態レベル及び統語論レベルでの[n>m]である場合を除いて、/N/の条件異音としての[m]を/M/から区別することなく、一括して扱うこととする。

この/N/と/M/からは、さらに長子音音素/N:/と/M:/が区別される。いずれの長子音音素も短子音音素と比してその出現は量的に少数だが、前者が後者を基としつつ、その状態が保たれた音であるという点で長母音音素と同質であり、間に「閉鎖」の解放がないことから、/N/及び/M/の連続とは認められない。[nna] (綱)と[n:na] (大便の幼児語)のように最小対立を示し、長母音の場合と同じく、1つの分節的な単位として機能していると言える。このような長短の区別は、/N/と/M/が他の短子音音素に比べて、より成節的であることを示していると言える。

母音を伴わない歯茎側面音[l]の出現は、多良間方言に特有の音声的特徴として多く指摘されている。音韻対応からは[ri]となるはずのものだが、後者は今のところ観察されていない。対格助辞[-ju]及び係助辞[-ja]の後接によって、[akal-ju>akallu] (蟻を)、[tul-ja>tulla] (鶏は)のように融合・促音化の現象が見られるが、その他の助辞の後接ではその成節性は失われず、十分に1拍分の長さを持ち、よって/L/が認められる。なお母音を伴う[l]について、その出現に構文論的な条件を有すること、また本稿では、特に語彙的意味の弁別をなさない形態論的な音韻のレベル(形態音韻論)を中心とはしないことから、歯茎弾き音[r]とその調音方法において異なるものの、/r/の異音として位置付けるものとする。

## 1-2 音節構造

多良間方言の音節構造には次の8種が認められる。

- (1)/V/ (2)/CV/ (3)/q/ (4)/N/ (4)'/N:/ (5)/M/ (5)'/M:/ (6)/L/

Cは子音、Vは母音を表す。(2)のCとVにはそれぞれ全ての子音と母音が立ちうるが、/ti/、/di/、/ri/、/ni/の音節は欠ける。(3)から(6)はそれぞれ成節子音音素による音節を表しており、(4)'、(5)'は長子音音素によるそれを表す。また、母音音素についても長短の区別のあることを示したが、(1)と(2)にもその別をつけることができるだろう。いずれも短い音節は音数律的に1拍を構成し、長い音節は2拍を構成する。

## 1-3 音節表

以下、多良間方言の音節とそれに該当する音声を示す。表では音節を//で囲わないで示している。\*は未確認の音節、-は体系的あきまである。また出現が稀である、あるいはそのほとんどが共通語由来の語において現れている音節は、()に入れて示す。

◦/V/及び/CV/{\*但しCは一般子音音素}

|         |           |      |       |       |                         |                         |                       |                         |                     |           |        |         |           |        |
|---------|-----------|------|-------|-------|-------------------------|-------------------------|-----------------------|-------------------------|---------------------|-----------|--------|---------|-----------|--------|
| a       | a:        | e    | e:    | ë:    | i                       | i:                      | ĩ                     | ĩ:                      | u                   | u:        | ü:     | (o)     | o:        |        |
| [a]     | [a:]      | [e]  | [e:]  | [ë:]  | [i~ji]                  | [i:~ji:]                | [ĩ]                   | [ĩ:]                    | [u]                 | [u:]      | [ü:]   | [o]     | [o:]      |        |
| ha      | ha:       | he   | he:   | *     | *                       | *                       | *                     | *                       | -                   | -         | -      | ho      | ho:       |        |
| [ha]    | [ha:]     | [he] | [he:] |       |                         |                         |                       |                         |                     |           |        | [ho~Φo] | [ho:~Φo:] |        |
| ka      | ka:       | ke   | ke:   | kë:   | ki                      | ki:                     | kĩ                    | kĩ:                     | ku                  | ku:       | kü:    | ko      | ko:       |        |
| [ka]    | [ka:]     | [ke] | [ke:] | [kë:] | [ki]                    | [ki:]                   | [k <sup>s</sup> ĩ~kĩ] | [k <sup>s</sup> ĩ:~kĩ:] | [ku]                | [ku:]     | [kü:]  | [ko]    | [ko:]     |        |
| ga      | ga:       | ge   | ge:   | gë:   | gi                      | gi:                     | gĩ                    | gĩ:                     | gu                  | gu:       | gü:    | go      | go:       |        |
| [ga]    | [ga:]     | [ge] | [ge:] | [gë:] | [gi]                    | [gi:]                   | [g <sup>ʒ</sup> ĩ~gĩ] | [g <sup>ʒ</sup> ĩ:~gĩ:] | [gu]                | [gu:]     | [gü:]  | [go]    | [go:]     |        |
| ta      | ta:       | te   | te:   | -     | ti                      | ti:                     | -                     | -                       | tu                  | tu:       | -      | to      | to:       |        |
| [ta]    | [ta:]     | [te] | [te:] |       | [ti]                    | [ti:]                   |                       |                         | [tu]                | [tu:]     |        | [to]    | [to:]     |        |
| da      | da:       | (de) | de:   | -     | di                      | di:                     | -                     | -                       | du                  | du:       | -      | (do)    | do:       |        |
| [da]    | [da:]     | [de] | [de:] |       | [di]                    | [di:]                   |                       |                         | [du]                | [du:]     |        | [do]    | [do:]     |        |
| -       | -         | (ce) | ce:   | cë:   | ci                      | ci:                     | cĩ                    | cĩ:                     | cu                  | (cu:)     | cü:    | -       | -         |        |
|         |           |      |       |       | [tse~t <sup>h</sup> e:] | [tse~t <sup>h</sup> e:] | [tsë:]                | [t <sup>h</sup> ĩ]      | [t <sup>h</sup> ĩ:] | [tsĩ]     | [tsĩ:] | [tsu]   | [tsu:]    | [tsü:] |
| sa      | sa:       | (se) | se:   | së:   | si                      | si:                     | sĩ                    | sĩ:                     | su                  | (su:)     | sü:    | (so)    | (so:)     |        |
| [sa]    | [sa:]     | [se] | [se:] | [së:] | [si~ĩ]                  | [si~ĩ]                  | [sĩ]                  | [sĩ:]                   | [su]                | [su:]     | [sü:]  | [so]    | [so:]     |        |
| (za)    | *         | *    | *     | zë:   | zi                      | zi:                     | zĩ                    | zĩ:                     | zu                  | zu:       | zü:    | *       | *         |        |
| [za]    |           |      |       |       | [dzë:]                  | [dʒi]                   | [dʒi:]                | [zi~dzi]                | [zi~dzi]            | [dzu]     | [dzu:] | [dzü:]  |           |        |
| ra      | ra:       | (re) | re:   | -     | ri                      | ri:                     | -                     | -                       | ru                  | ru:       | -      | (ro)    | ro:       |        |
| [ra~la] | [ra:~la:] | [re] | [re:] |       | [ri]                    | [ri:]                   |                       |                         | [ru~lu]             | [ru:~lu:] |        | [ro]    | [ro:]     |        |
| na      | na:       | (ne) | ne:   | -     | ni                      | ni:                     | -                     | -                       | nu                  | nu:       | -      | (no)    | no:       |        |
| [na]    | [na:]     | [ne] | [ne:] |       | [ni]                    | [ni:]                   |                       |                         | [nu]                | [nu:]     |        | [no]    | [no:]     |        |
| fa      | fa:       | *    | fe:   | *     | fi                      | fi:                     | (fi)                  | (fi:)                   | fu                  | fu:       | *      | *       | *         |        |
| [fa]    | [fa:]     |      | [fe:] |       | [fi]                    | [fi:]                   | [fi]                  | [fi:]                   | [fu]                | [fu:]     |        |         |           |        |
| va      | va:       | *    | ve:   | *     | vi                      | vi:                     | vĩ                    | *                       | vu                  | *         | *      | *       | *         |        |
| [va]    | [va:]     |      | [ve:] |       | [vi]                    | [vi:]                   | [vĩ]                  |                         | [vu]                |           |        |         |           |        |
| pa      | pa:       | (pe) | pe:   | *     | pi                      | pi:                     | pĩ                    | pĩ:                     | pu                  | pu:       | *      | *       | po:       |        |
| [pa]    | [pa:]     | [pe] | [pe:] |       | [pi]                    | [pi:]                   | [p <sup>s</sup> ĩ~pĩ] | [p <sup>s</sup> ĩ:~pĩ:] | [pu]                | [pu:]     |        |         | [po:]     |        |
| ba      | ba:       | (be) | be:   | bë:   | bi                      | bi:                     | bĩ                    | bĩ:                     | bu                  | bu:       | bü:    | (bo)    | bo:       |        |
| [ba]    | [ba:]     | [be] | [be:] | [bë:] | [bi]                    | [bi:]                   | [bĩ]                  | [bĩ:]                   | [bu]                | [bu:]     | [bü:]  | [bo]    | [bo:]     |        |
| ma      | ma:       | me   | me:   | *     | mi                      | mi:                     | mĩ                    | mĩ:                     | mu                  | mu:       | *      | (mo)    | mo:       |        |
| [ma]    | [ma:]     | [me] | [me:] |       | [mi]                    | [mi:]                   | [mĩ]                  | [mĩ:]                   | [mu]                | [mu:]     |        | [mo]    | [mo:]     |        |

o/CV/及び/q/~/L/{\*但しCは口蓋音及び唇音子音素}

|       |        |      |       |       |        |       |        |      |       |      |       |
|-------|--------|------|-------|-------|--------|-------|--------|------|-------|------|-------|
| ja    | ja:    | je   | je:   | ju    | ju:    | jo    | jo:    | wa   | wa:   | we   | we:   |
| [ja]  | [ja:]  | [je] | [je:] | [ju]  | [ju:]  | [jo]  | [jo:]  | [wa] | [wa:] | [we] | [we:] |
| (hja) | hja:   | -    | -     | *     | *      | *     | *      | -    | -     | -    | -     |
| [hja] | [hja:] |      |       |       |        |       |        |      |       |      |       |
| (kja) | *      | -    | -     | *     | kju:   | (kjo) | kjo:-  | -    | -     | -    |       |
| [kja] |        |      |       |       | [kju:] | [kjo] | [kjo:] |      |       |      |       |
| *     | *      | -    | -     | *     | *      | *     | (gjo:) | -    | -     | -    | -     |
|       |        |      |       |       |        |       | [gju]  |      |       |      |       |
| cja   | cja:   | *    | *     | cju   | cju:   | *     | cjo:   | -    | -     | -    | -     |
| [tʃa] | [tʃa:] |      |       | [tʃu] | [tʃu:] |       | [tʃo:] |      |       |      |       |
| sja   | sja:   | sje  | sje:  | sju   | sju:   | *     | sjo:   | -    | -     | -    | -     |
| [ʃa]  | [ʃa:]  | [ʃe] | [ʃe:] | [ʃu:] | [ʃu:]  |       | [ʃo:]  |      |       |      |       |
| zja   | zja:   | *    | *     | zju   | zju:   | *     | zjo:   | -    | -     | -    | -     |
| [dʒa] | [dʒa:] |      |       | [dʒu] | [dʒu:] |       | [dʒo:] |      |       |      |       |
| *     | *      | *    | *     | (rju) | rju:   | (rjo) | rjo:   | -    | -     | -    | -     |
|       |        |      |       | [rju] | [rju:] | [rjo] | [rjo:] |      |       |      |       |
| *     | *      | *    | *     | *     | (nju:) | *     | *      | -    | -     | -    | -     |
|       |        |      |       |       | [nju:] |       |        |      |       |      |       |
| *     | (pja:) | -    | -     | *     | *      | *     | (pjo:) | -    | -     | -    | -     |
|       | [pja:] |      |       |       |        |       | [pjo:] |      |       |      |       |
| (bja) | *      | -    | -     | *     | bju:   | *     | bjo:   | -    | -     | -    | -     |
| [bja] |        |      |       |       | [bju:] |       | [bjo:] |      |       |      |       |
| *     | *      | -    | -     | *     | (mju:) | *     | *      | -    | -     | -    | -     |
|       |        |      |       |       | [mju:] |       |        |      |       |      |       |

q [p, f, v, s, ʃ, k, t, d, l]

N[n~ɲ, ŋ, (m)] N:[n:]

M[m] M:[m:]

L[l]

以上の音節の内/fi/、/fu/、/vi/、/vu/について、これらは語中に位置した場合、その母音が無声化して現れる。これを成節的子音/F/、/V/として解する研究者も見られるが<sup>(11)</sup>、語頭・語尾ではほとんど無声化せず、共に閉鎖性の強い摩擦音である多良間方言の[f]、[v]の音声的特徴が、語中において際立たされた結果によるものだと考えられる。この方言の[f]、[v]の発声はやや唇歯音的であり、共通語よりも英語のそれに近く聞こ

える。また今回確認できた/**vV**/の音節は、全て促音の直後に現れていた。

## 2. 音韻対応

多良間方言と共通語との対応関係を以下に示す。なお対応表を除いて、共通語の音韻は片仮名表記を用いて表している。

### 2-1 母音対応

(1) **短母音音素** 多良間方言の短母音と共通語のそれとは次のように対応する。

|     |   |   |   |   |   |             |
|-----|---|---|---|---|---|-------------|
| 共通語 | a | e | i | u | o | (ア エ イ ウ オ) |
|     |   |   |   |   |   |             |
| 多良間 | a | i | i | u |   |             |

共通語のアに/a/、エに/i/が対応し、ウとオは/u/に統合している。イに対応する音素は/i/と/i/であるが、連母音(ア)イに対応するときはそのほとんどで/i/が現れる。また語頭のイにも、[i]が対応する場合が多いようである。

〈ア〉[aka□a:l] (赤い) [aki] (開く)      〈エ〉[ibi] (伊勢えび) [kui] (声)  
 〈イ〉[izi] (言う) [isi] (石) [daidzi] (大変{\*大事}) [mainit□i] (毎日)  
 〈ウ〉[usi] (牛) [usunu:] (失う)      〈オ〉[ukil] (起きる) [ukina:] (沖縄)

但し、共通語のイが/N/、/na/に、ウが/M/、/fu/に対応している例も見られる。

[nnabikal] (稲光) [nama] (今) [mmaril] (生まれる) [futtsi] (移る)

なお、/c/、/z/、/s/の後に位置する共通語の/u/は、/i/に対応することが多い。

[ci ffi] (作る) [midzira□a:l] (珍しい) [usi] (白)

### (2) 長母音音素

A. 多良間方言の/i:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/e/と/i/に対応する。

[i:] (絵) [mi:] (目) [ni:] (荷) [ki:] (木)

なお、[ie]>[i:]のように長母音化した語も観察されている。

[pi: fa:l] (寒い, 冷たい{\*ヒエhie})<sup>(12)</sup>

また係助辞/-ja/が、語幹末尾音が[i]で、その直前の音節の母音が[a]である語に後接した場合に/i:/が現れることがある。但し、原則的な変化ではない。

[ami:] (雨は{\*ami-ja[ame:]も可})

B. 多良間方言の/i:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/i/に対応する。

[ki:] (気) [pi:] (火) [mi:] (巳) [tsi:] (乳)

なお、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/i/への対応は/i:/がそのほとんどであり、/i:/による対応例は、現在のところ上記の2例しか確認できていない。

C.多良間方言の/a:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/a/及び、連母音/awa, awo/に対応する。

[pa:] (葉) [ta:] (田) [na:] (名) [a:] (粟) [ka:] (川) [a:sa] (アヲサ)

なお、係助辞/-ja/が、末尾音が[a]である語に後接した場合にも/a:/が現れる。

[nara:] (自分は{\*nara-ja}) [ata:] (明日は{\*ata-ja})

D.多良間方言の/u:/は、共通語の1音節1拍の語の短母音音素/u/と/o/に対応する。また、いわゆるハ行四段動詞に相当する語の多くで、/u:/が現れる。

[ju:] (湯) [pu:] (帆) [fu:] (食う) [baru:] (笑う)

なお、対格助辞/-ju/が、末尾音[u]である語に後接した場合にも/u:/が現れる。また指示代名詞の場合のみ、/-ju/が末尾音[l]である語に後接して/(r)u:/が現れる。

[pitu:] (人を{\*pitu-ju}) [munu:] (ものを{\*munu-ju})/

[kuru:] (これを{\*kul-ju})

E.多良間方言の/e:/は、共通語の連母音/ie, ija, {ai, ae}/に対応する。1-1の(1)参照。

[ke:ril] (消える) [me:ku] (宮古) [e:gu] (歌{\*アイゴ}) [me:] (前)

なお、係助辞/-ja/が、末尾音が[i]である語に後接した場合/e:/が現れる。但し、その直前が母音、すなわち連母音である場合は当てはまらない。

[ime:] (意味は{\*imi-ja}) [fake:] (酒は{\*faki-ja})

また指示代名詞においてのみ、末尾音[l]の後に/-ja/が後接して/(r)e:/が現れる。

[ure:] (それは{\*ul-ja})

F.多良間方言の/o:/は、共通語の連母音/au, ao, owa/に対応する。但し、仲筋では[au]の融合は起こらず、塩川の[o:]と語彙的な対立を示している。1-1の(1)参照。

[ko:] (買う{\*塩川}) [o:fa:l] (青い) [jo:fa:l] (弱い)

なお、係助辞/-ja/が、末尾音が[u]である語に後接した場合/o:/が現れることがある。

[pito:] (人は{\*pitu-ja}) [muno:] (ものは{\*munu-ja})

G.多良間方言の/ë:/について、共通語との対応関係は見られず、末尾音が/i/である語に係助辞/-ja/が後接して生じる融合音である。

[pagë:] (脚は{\*pagi-ja}) [futsë:] (口は{\*futsi-ja})

H.多良間方言の/ü:/について、共通語との対応関係は見られず、末尾音が/i/である語に対格助辞/-ju/が後接して生じる融合音である。

[mitsü:] (道を{\*mitsi-ju}) [panasü:] (話を{\*panasi-ju})

以下の子音対応については、主に短母音を含む音節についてのみ記述する。

## 2-2 子音対応

(1) カ行子音…共通語のカ行子音には、音節によって多良間方言の/k/、/f/が対応する。

|     |    |    |    |    |                |
|-----|----|----|----|----|----------------|
| 共通語 | ka | ke | ki | ku | ko (カ ケ キ ク コ) |
|     |    |    |    |    |                |
| 多良間 | ka | ki | kī | fu | ku             |

共通語のカに/ka/、ケに/ki/、キに/kī/、クに/fu/、コに/ku/がそれぞれ対応しており、全ての段に区別がある。

〈カ〉[kakī] (書く) [ka:ra] (瓦) 〈ケ〉[taki] (竹) [kiddzi] (削る)

〈キ〉[kīŋ] (着物) [kiki] (聞く) 〈ク〉[fumu] (雲) [fuful] (薬)

〈コ〉[kuma] (ここ) [kugani] (黄金)

但し、共通語のカが/ga/、/ku/に、キが/ki/に、クが/ku/に対応している例も見られる。

[gara:fa] (鳥) [kubi] (壁) [kimil] (決める) [kutibuni] (頬骨{\*口骨})

(2) ガ行子音…共通語のガ行子音には、音節によって多良間方言の/g/、/v/が対応する。

|     |    |    |    |    |                |
|-----|----|----|----|----|----------------|
| 共通語 | ga | ge | gi | gu | go (ガ ゲ ギ グ ゴ) |
|     |    |    |    |    |                |
| 多良間 | ga | gi | gī | vī | gu             |

共通語のガに/ga/、ゲに/gi/、ギに/gī/、グに/vī/、ゴに/gu/がそれぞれ対応しており、全ての段に区別がある。

〈ガ〉[agal] (上がる) [kagam] (鏡)

〈ゲ〉[kagi] (影) [niŋgiŋ] (人間)

〈ギ〉[m:gi] (右) [gagi] (鉤)

〈グ〉[do:vī] (道具{\*do:, do:guとも})

〈ゴ〉[kagu] (籠) [masu:gu] (真っ直ぐ)

(3) サ行子音…共通語のサ行子音には、音節によって多良間方言の/sj/、/s/が対応する。

|     |     |    |    |    |     |             |
|-----|-----|----|----|----|-----|-------------|
| 共通語 | sa  | se | si | su | so  | (サ セ シ ス ソ) |
|     |     |    |    |    |     |             |
| 多良間 | sja | si | si | si | sju |             |

共通語のサに/sja/、セに/si/、シに/si/、スに/si/、ソに/sju/がそれぞれ対応している。イ段とウ段が同音となり、またア段とオ段で口蓋化が生じている。

<サ>[faki] (酒) [fakil] (裂ける) <セ>[afi] (汗) [fiŋfi:] (先生)  
 <シ>[usi] (牛) [ka:si] (お菓子) <ス>[usi] (臼) [sigata] (姿)  
 <ソ>[bɯfu] (へそ) [fudatil] (育てる)

但し、共通語のサが/sa/に、シが/si/に、またスが/sju/に対応している例も見られる。  
 なおサと/sa/の対応例は、漢数詞の「三」など、ごく限られた語にのみ現れている。

[san̩tu] (三斗) [fiŋka] (臣下) [fuɸul] (薬)

(4) ザ行子音…共通語のザ行子音には音節によって多良間方言の/d/、/z/、/zj/が対応する。

|     |    |    |      |      |     |             |
|-----|----|----|------|------|-----|-------------|
| 共通語 | za | ze | (zi) | (zu) | zo  | (ザ ゼ ジ ズ ゾ) |
|     |    |    |      |      |     |             |
| 多良間 | da | zi | zi   | zi   | zju |             |

共通語のザに/da/、ゼに/zi/、ジに/zi/、ズに/zi/、ゾに/zju/がそれぞれ対応している。イ段とウ段が同音となり、またオ段で口蓋化が生じている。

<ザ>[ada] (痣) [kiɖam] (刻む) <ゼ>[maddzil] (混ぜる) [udziŋ] (お膳)  
 <ジ>[dzinaŋ] (次男) [tudzi] (妻{\*刀自}) <ズ>[kidzi] (傷) [padzimil] (始める)  
 <ゾ>[kuzju] (去年) [zju:fi:] (雑炊)

但し、共通語のザが/zja/(/zja:/)に、ゼが/di/に対応している例<sup>(13)</sup>も見られる。

[kudʒara] (小皿) [dʒa:] (部屋{\*座}) [kadi] (かぜ)

(5) タ行子音…共通語のタ行子音には、音節によって多良間方言の/t/、/c/が対応する。

|     |    |    |    |    |    |             |
|-----|----|----|----|----|----|-------------|
| 共通語 | ta | te | ci | cu | to | (タ テ チ ツ ト) |
|     |    |    |    |    |    |             |
| 多良間 | ta | ti | ci | ci | tu |             |

共通語のタに/ta/、テに/ci/、チに/ci/、ツに/ci/、トに/tu/がそれぞれ対応しており、また、イ段とウ段が同音となっている。

〈タ〉[takaʃa:l] (高い) [tani] (種) 〈テ〉[tigami] (手紙) [tatil] (立てる)  
 〈チ〉[akatsi] (血) [mitsi] (道) 〈ツ〉[tsibu] (壺) [tsiku:] (使う)  
 〈ト〉[tul] (鶏) [tunal] (隣)

但し、共通語のチが/ti/に対応している例も見られる。

[kutibuni] (頬骨{\*口骨})

(6) ダ行子音…共通語のダ行子音には、音節によって多良間方言の/d/、/z/が対応する。

|     |    |    |      |      |    |           |
|-----|----|----|------|------|----|-----------|
| 共通語 | da | de | (zi) | (zu) | do | (ダ デ ズ ド) |
|     |    |    |      |      |    |           |
| 多良間 | da | di | zī   | zī   | du |           |

共通語のダに/da/、デに/zi/、ズに/zī/、ドに/du/がそれぞれ対応しており、また、イ段とウ段が同音となっている。これらはまたザ行のイ段・ウ段とも同音であり、多良間方言も、共通語同様、四つ仮名の区別はないと言える。

〈ダ〉[nada] (涙) [mida] (まだ) 〈デ〉[udi] (腕{\*kainaとも}) [idil] (出る)  
 〈ズ〉[adzī] (味) [dzī:] (地) 〈ヅ〉[midzī] (水) [sīdzīm] (沈む)  
 〈ド〉[duru] (泥) [duku] (毒)

(7) ナ行子音…共通語のナ行子音には、音節によって多良間方言の/n/、/N/、/M/が対応する。

|     |    |     |    |     |    |             |
|-----|----|-----|----|-----|----|-------------|
| 共通語 | na | ne  | ni | nu  | no | (ナ ネ ニ ヌ ノ) |
|     |    | └─┐ |    | └─┐ |    |             |
| 多良間 | na | ni  | N  | M   | nu |             |

共通語のナに/na/、ネに/ni/が対応している。またイ段の対応について、この方言には/nī/の音節が存在しないことから、ニはネと同じく/ni/、もしくは/N/が対応している。ヌとノは/nu/に統合しているが、ヌはまた/M/にも対応する。

〈ナ〉[nari] (慣れる) [nagaʃa:l] (長い) 〈ネ〉[nini] (寝る) [nika] (猫)  
 〈ニ〉[ni:l] (煮る) [ŋgaʃa:l] (苦い) 〈ヌ〉[nul] (塗る) [mni] (濡れる)  
 〈ノ〉[num] (飲む) [nunu] (布)

但し、共通語のノが/nu:/に対応している例も見られる。

[nu:ɸil] (乗せる)

(8) ハ行子音…共通語のハ行子音には、音節によって多良間方言の/p/、/f/が対応する。

|     |    |    |    |    |    |             |
|-----|----|----|----|----|----|-------------|
| 共通語 | ha | he | hi | fu | ho | (ハ ヘ ヒ フ ホ) |
|     |    |    |    |    |    |             |
| 多良間 | pa | pi | pĩ | fu | pu |             |

共通語のハに/pa/、ヘに/pi/、ヒに/pĩ/、フに/fu/、ホに/pu/がそれぞれ対応しており、全ての段に区別がある。

〈ハ〉[pakĩ] (吐く) [pana] (花) 〈ヘ〉[pinal] (減る) [pinnaɸa:l] (変な、変わった)

〈ヒ〉[pigi] (髭) [pi:ma] (昼間) 〈フ〉[futa:tsi] (二つ) [funi] (船)

〈ホ〉[puni] (骨) [pumil] (褒める)

(9) バ行子音…共通語のバ行子音には、音節によって多良間方言の/b/、/v/が対応する。

|     |    |    |    |      |    |             |
|-----|----|----|----|------|----|-------------|
| 共通語 | ba | be | bi | bu   | bo | (バ ベ ビ ブ ボ) |
|     |    |    |    |      |    |             |
| 多良間 | ba | bi | bĩ | (vi) | bu |             |

共通語のバに/ba/、ベに/bi/、ビに/bĩ/、ボは/bu/にそれぞれ対応している。ウ段について、名嘉真1992などで[V] (本稿での[vi])で報告されている語の多くは、現在[ɸu{\*fiか?母音は無声化}]によって現れている。だが[avva] (油) など、音韻同化の生じた語にその痕跡が認められることから、()に入れてではあるが、ブと/vi/の対応を認めている。

〈バ〉[bakal] (ばかり{\*程度の副助辞}) 〈ベ〉[nabi] (鍋) [jubi] (タベ)

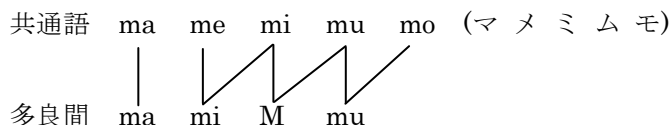
〈ビ〉[tabĩ] (旅) [tubikusĩ] (飛び越す) 〈ブ〉[vĩtsĩ] (打つ{\*現在はfutsĩが普通})

〈ボ〉[ubuil] (覚える) [tsĩbu] (壺)

但し、共通語のビが/bi/、/gi/に、ブが/bu/に対応している例も見られる。

[uibi] (指) [fugi] (首) [kubu] (昆布)

(10) マ行子音…共通語のマ行子音には、音節によって多良間方言の/m/、/M/が対応する。



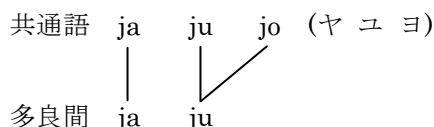
共通語のマに/ma/が対応し、ムとモは/mu/に統合している。イ段とエ段が同音となっており、またイ段とウ段はそれぞれ/mi/、/mu/の他に、/M/にも対応している。なお、共通語のミ、ムと/M/の対応は、その出現位置によって制限されていない。

<マ>[mami] (豆)    [matsi] (待つ)    <メ>[jumi] (嫁)    [midziraɸa:l] (珍しい)  
 <ミ>[midzi] (水)    [mim] (耳)    <ム>[muku] (婿)    [num] (飲む)  
 <モ>[munu] (もの) [mutsi] (持つ)

但し、共通語のマが/mi/に、ミが/bi/に対応している例も見られる。

[mida] (まだ) [kabi] (紙)

(11) ヤ行子音…共通語のヤ行子音には多良間方言の/j/が対応する。



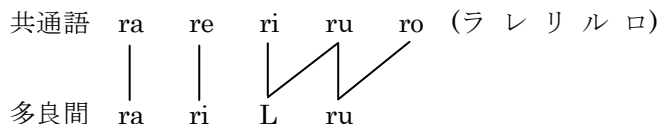
共通語のヤに/ja/が対応し、ユとヨは/ju/に統合している。

<ヤ>[jaki] (焼く)    [jaɸai] (野菜)    <ユ>[jum] (ゆみ)    [jubi] (夕べ)  
 <ヨ>[jumi] (嫁)    [ju:tsi] (四つ)

但し、共通語のヨが/i/に対応している例も見られる。

[uigi] (泳ぐ)

(12) ラ行子音…共通語のラ行子音には、音節によって多良間方言の/r/、/L/が対応する。



共通語のラに/ra/に、レが/ri/に、リが/L/にそれぞれ対応しており、ルとロは/ru/に統合している。またルは/L/とも対応している。なお、/L/は原則として語頭には立たない。

<ラ>[para] (柱)    [tura] (寅)    <レ>[turi] (取れ{\*命令形}) [naril] (慣れる)

〈リ〉[tul] (鶏) [uril] (下りる) 〈ル〉[fa:ru] (猿) [kalla:l] (軽い)  
 〈ロ〉[iru] (色) [mutsi] (持つ)

但し、共通語のルに対応する語中・語尾の/ru/、/L/が脱落・長音化している例や、子音[r]の脱落によって、/i/が対応している例も見られる。

[pi:ma] (昼間) [ma:ku] (丸い) [si:] (汁{\*siruとも}) [aiki] (歩く{\*alkiとも})

また、宮古・八重山方言に広く見られる[r]>[s, f]の変化は多良間方言にも見られる。このような音韻変化は[i]の直後の[r]に多く見られ、「iにともなう摩擦音によって同化されたもの」(中本1976:401)と考えられている<sup>(14)</sup>。

[kisi] (切る) [kisi:l] (切れる) [pisu:fa:l] (広い) [pisa:fa:l] (平たい)

(13) ワ行子音 共通語のワ行子音には多良間方言の/b/が対応する。

|     |    |      |      |    |           |
|-----|----|------|------|----|-----------|
| 共通語 | wa | (w)e | (w)i | wo | (ワ エ オ ヲ) |
|     |    |      |      |    |           |
| 多良間 | ba | bi   |      | bu |           |

共通語のワに/ba/、ヲが/bu/にそれぞれ対応しており、イ段とエ段が同音となっている。

〈ワ〉[bakamunu] (若者) [bal] (割る) 〈エ〉[bigul] (挟る) [bi:fu:fa:l] (酔う{\*ゑふ})  
 〈オ〉[bi:dai] (椅子{\*座り台}) 〈ヲ〉[budul] (踊る) [buba] (叔母)

但し、共通語のワに/wa/が対応する例も見られる。

[waŋ] (お椀) [wassa:l] (悪い)

### 3. 多良間方言にみられる音韻同化の現象

ここまでの多良間方言の音韻体系及び共通語との音韻対応の記述の中で、連母音ならびに助辞の膠着による融合・長母音化の現象が示されてきた。だがこの他、多良間方言では様々な音韻同化、すなわち/CV-r-V/における[r]の同化現象、また順行・逆行同化による語頭・語中の破裂・摩擦・破擦音の促音化の現象も観察されている。以下これらの同化現象について「inter-vocalicな[r]の同化現象」と「その他の音韻同化現象」(加治工1977:17)とに分けて、記述していく。

### 3-1 intervocalicな[r]の同化現象

[ffa] (子ども) のような/qCV/の音節構造は、/CV-r-V/の音節構造から、[r]の直前の母音脱落及び[r]の音韻同化の現象によって生じたと考えられる。/CV-r-V/での子音によって、次のような変化が認められる。

#### (1)/qfV<kV-r-V/

[ffa] (子ども) {<[fura]<[kura]}, [ffil] (くれる) {<[furi-]<[kure-]},  
[ffuɸa:1] (黒い) {<[furu-]<[kuro-]}, [ffaɸa:1] (暗い) {<[fura-]<[kura-]},  
[tsiffi] (作る) {<[tsifuri-]<[tsukuri-]}

この他、/fV-r-V/からの変化が想定できる語に[ffi] (降る)<[furi-]がある。

#### (2)/qvV<bV-r-V, u-rV/

[avva] (油) {<[abura]}, [kaqvi] (被る) {<[kaburi-]},  
[qva] (あなた) {<[ura]}, [qvi] (売る) {<[uri-]}

ワ行音に対応する/bV/の音節を含む語にはこのような変化は現れない。

#### (3)/qsV<sV-r-V/

[ssi:1] (擦る) {<[siri-]}, [ssuɸa:1] (白い) {<[siru-]},  
[ssaŋ] (知らぬ) {<[sira-]}, [ssail] (知られる{\*可能形}) {<[sirari-]},  
[bassi(:)1] (忘れる) {<[basuri-]<[wasure-]}

このタイプの語は、2-2の(12)で示した[r]>[s, ʃ]の変化と、一見同じ変化によるもののように見える。だがこの場合はさらに母音の脱落が生じており、「その他の音への変化」と同じく促音化して現れている。本稿ではこの点に基準を設け、[r]>[s, ʃ]の音韻同化を二種類に区別して扱っている。また[umuɸɸa:1] (面白い)もこのタイプに属し、[umuɸɸiɸa:1] (<[umuɸiri(u?)>-)からさらに融合化が進んだものである。

#### (4)/qzV<zV-r-V/

[kizzi] (削る) {<[kizuri-]}, [maddzi] (混じる) {<[madziri-]},  
[baddzi] (殴る) {<[badziri-]<[wadziri-]<sup>(15)</sup>}, [paddzi] (外す、脱ぐ) {<[padzuri-]},  
[fuddza] (鯨) {<[fudzira]<[kudzira]}, [uddza] (鶉) {<[udzura]}

(3)と平行的な、母音脱落の有無による変化の種類の違いは見られない。またこのタイプの語では、同化後/za/となっているであろう箇所が、/da/ではなく/dza/に対応している。このことは、動詞のいわゆる未然形に関しても言い得ることである。

[kiddzaŋ] (削らぬ) {<[kizura-]}, [maddzaŋ] (混じらぬ) {<[madzira-]},

[baʃaddʒaŋ] (怒らぬ) {<[baʃadʒira-]<[wasa(?)dʒira-]}

(5)/qcV<cV-r-V/

[futtsi] (移る)<[futsiri-]

確認できたのはこの一語のみである。

### 3-2 その他の音韻同化現象

この方言にはintervocalicな[r]の同化現象の他、順行同化、また僅かだが逆行同化が見られる。順行同化は助辞の膠着した語形と形容詞<sup>(16)</sup>とに多く現れ、そのほとんどで促音化する。無声子音に挟まれた母音の無声化・脱落による同化現象は稀であり、この場合の音節連続は多く保たれたままである<sup>(17)</sup>。

(1) 順行同化

/cVsa>-qcja/ ; [attʃa:l] (熱い) {<[atsusa-]}, [muttʃa:l] (粘っこい) {<[mutʃisa-]}

/rVsa>-qra/ ; [kalla:l] (軽い) {<[karusa-]}, [magalla:l] (曲がった) {<[magarisa-]},

[utulla:l] (恐ろしい) {<[uturusa-]},

[navulla:l] (滑っこい) {<[naburi(?)sa-]}<sup>(18)</sup>

/Lj->-qr-/ ; [tullu] (鶏を) {<[tul-ju]<[turi-ju]}, [~julla] (~よりは) {<[~jul-ja]<

[~juri-ja]}, [bullu:] (いるよ) {<[bul-ju]<[buri(wori)-ju]},

[ikitallo:] (行ったよ) {<[ikital-jo]<[ikitarijo]}

[fu:] (食う)について、[kufu]>[ffu]>[fu:]のような派生が考えられるが、他の語例が確認できず、明らかではない。また共通語のフサガル(塞がる)、フサグ(塞ぐ)に対応する[ffagal]、[ffagi]について、3-1の(1)タイプを示し、前者が[ffagal] (暗がる\*暗くなる)と同音であることから、[ffaʃa:l] (暗い)等と共に[kura-]という語基から派生したように一見思われる。だが[fuʃagal]、[fuʃagi]も用いられていることを考え合わせると、これらが別系統の語でなければ、[fusa-]>[ffa-]という順行同化の生じた例となる。この場合、[fuʃagal]及び[fuʃagi]は、類推によって現れた新しい語形ということになるだろうか。

(2) 逆行同化

次の一例のみ確認されている。

[wassa:l] (悪い)<[warusa-]

#### 4. 結語

以上、多良間方言の音韻体系及び共通語との対応、さらにその変化の現象についての記述を試みてきた。この方言に特徴的なものとしては、共通語のル(ル)に対応する、成節子音音素/L/が用いられること、また/N/とは別に、/M/がやはり成節音素として立ちうることなどが挙げられる。さらに音韻同化の現象について、特にintervocalicな[r]の同化現象では、その音節構造/CV-r-V/の母音のほとんどが狭母音であり、そして子音は全て破裂・摩擦・破擦音のいずれかであった。つまりこの現象においては、中本(1976)でも指摘されていたように、(摩擦音など)呼気の阻害の程度が大きい音声との影響関係は明らかである。これは1-1の(3)で述べた、閉鎖・狭窄の持続をその本質とする「詰める音」につながり、よって促音化の現象が多く見られる。この方言ではこの促音化が盛んであり、[ʃassi] (刺す)や[kaffasi] (隠す)のように、類推による促音化が生じていると思われる例も見られる<sup>(19)</sup>。

本研究の主旨は多良間方言の音韻についての記述であるが、今回確認できなかった音節、また中舌母音/i/の扱いなど、今後の課題は少なくない。また/i/に関わって、あくまで私見だが、サ変動詞/si/ (する)がその発声においてi母音の噪音性を薄れさせ、[su:]に近づきつつあるように思われてならない。当然個人差はあるが、共通語などの影響によるゆるみが考えられる。確認を急ぎたい。

#### 付記

本稿は拙論「宮古多良間島方言の基礎的研究」(2002年度千葉大学大学院修士論文、以下単に修士論文)の序章(はじめに)第3節「音韻論」に、改訂及び加筆を施したものである。なお多良間方言の音韻については、前々稿「宮古多良間島塩川方言動詞・形容詞の基礎的研究」(2000年度琉球大学卒業論文、以下単に卒業論文)でもその記述を試みている。だが、両論文で用いられている方法論は大きく異なっており、修士論文では特に、卒業論文では認めなかった母音音素及び成節子音音素(/N, M/)の長短の別を認め、また半母音音素/j/を立てず、口蓋音子音音素として/kj, cj, zj, sj, bj, mj/を取り出すことによって、その音節構造から/CSV/を除いている。本稿はこの修士論文に追従する立場を取っている。

- (1) 狩俣(1997, 2000)では、多良間方言の形容詞語尾の[-ʃa:l]や母音融合の現象などの、八重山方言との共通点を手掛かりに多良間方言の八重山方言への所属が主張されている。だが「形容詞の成立が名詞や動詞よりもおそいことは疑ひなく、その名詞や動詞から形容詞が生まれてきたこともまた確かなこと」(山崎1992:10)であるとするならば、やはり動詞における共通性は最も重要な項目の1つだろう。多良間方言の動詞には他の宮古諸方言との共通点も多く観察されている。
- (2) 塩川-仲筋で、/o:/-/au/の音韻対立が見られる。例、「棒」/bo:/-/bau/、「買う」/ko:/-/kau/ また「松明」を指し示す語にのみ、/umuci:/-/umaci:/のように/u-/a/の対立が現れている。
- (3) 「多良間方言」内の塩川と仲筋の扱いについては、さらなる考察が当然求められる。文法体系においてもその細部に対立の現れる可能性はまだ否定できないが、本稿では暫定的に一括して扱っている。
- (4) 旧姓本村竹。大正10年生。言語形成期を多良間の塩川で過ごし、昭和50年(54歳)に沖縄本島南部東風平町へ移る。よって調査時は沖縄本島在住。2002年5月逝去。筆者の祖母にあたる。また一部ではあるが、父下地一男(昭和17年生。言語形成期を多良間の仲筋で過ごした後、宮古本島 沖縄本島へと移り現在に至る)にも音声の確認など、細かい点についてのアドバイスを受けている。
- (5) この中舌母音/i/についてこれまで多くの論説がみられるが、本稿での考察はその論議の結論を見出すまでに至らず、これまで通り/i/を用いることとした。
- (6) 首里方言でこれらの語は、それぞれdeeni、teegee、(u)nigeeのように、全て長音化する(『沖縄語辞典』より。以下首里方言の引用は全て同書による)。しかし、行き先を表す格助辞へ(向格)の場合、多良間方言[ke:]に対し、首里方言では-kaiのように長母音化が生じないという、逆の現象が見られる。ちなみに石垣方言でも、向格は-kaiで現れている(登野城2002)。
- (7) なお、「帰る」に相当する語には[ke:l]と[kail]の2形式が確認された。だが、この方言にはもともと「帰る」に該当する語はなく「行く」、「来る」と同語形(平山1983:450)が用いられていたものであり、よってこれは比較的新しい語であると言える。強変化動詞からの類推によって2形式が生じたものと思われるが、同音形式[kail](返る)などへの影響の有無は、今のところ確認できていない。
- (8) なお、マエ(前)は[mai]で現れるのが基本的であり、両形式の、その意味・用法による使い分けは今のところ見られない。また、主に<到着点>を表す[-ŋke:](向格)、[-ŋka](処格)を伴って、[ga mai(ŋke:)](～のところへ)という言語形式によってヒト名詞の空間化を行う用法においては、原則的に長音化しない。
- (9) 例えば仲原(2003)では長音音素/R/を認め、「これら長音の音声実質はそれぞれ直前

の母音と同じであるが、分節音素としてのそれぞれの母音の属性をこえて、時間的単位としての一拍分の長さが意味の弁別に関与している」(p148・下線引用者)と解釈する。

- <sup>(10)</sup> この方言では[nudu] (咽喉)、[nunu] (布)のように、語頭・語尾に関わらず[no]-[nu]の音韻対応を示すのが普通である。これまでに[nu(o)]>([n]>[m]という変化の想定のできる語は[mbil] (伸びる)、[mbasi] (伸ばす)、[mnil] (濡れる)等があり、調査が進めば/M/から/N/の条件異音[m]を区別する必要の出る可能性はある。その音の現れる位置も考慮して、検討していかなければならないと考える。
- <sup>(11)</sup> 長浜(1978)では、本稿で促音と解した語頭の[f]、[v]についても、成節的子音/F/、/V/として扱っている。だがこれらを認めることは、他の促音/q/に含まれる音声についても成節的子音として扱うことを意味し、適切ではない。
- <sup>(12)</sup> この他[mi:l] (見える)、[ni:l] (煮える)などが、[ie]>[i:]によってそれぞれ[mi:l] (見る)、[ni:l] (煮る)と同音となっている。動詞の場合、[ie]が[i:]と[e:]のいずれに変化するかは対となる動詞の有無に関わるか。
- <sup>(13)</sup> 名嘉真1992では共通語のぜに対応する音韻は/di/とされているが、[kadi] (風)以外にその用例は確認できず、また[diŋ] (金{\*銭}) (名嘉真1992:274)は現在[dʒiŋ]という形をとって現れていることから、本稿では、ぜと/zi/の対応を認めている。
- <sup>(14)</sup> 中本(1976)では[r]の変化を、大きく「[s, ʃ]への変化」と「その他の音への変化」に区別しているが、ここで挙げた「[r]>[s, ʃ]の変化」は「その他の音への変化」とは、同じく同化現象ではあるものの、タイプを異にするものと考えられる。また「[r]>[s, ʃ]の変化」の中にも「その他の音への変化」と同じタイプのものが存在することから(本文においても後に触れているが)、促音化の有無を1つの・基準として、「[r]>[s, ʃ]の変化」に2種認めている。
- <sup>(15)</sup> 首里方言の'wazi=juN (沸く, 沸騰する 腹を立てる, 憤慨する)と同系の語であろう。後の[baʃaddʒaŋ] (怒らぬ)も、これらと同系の語と思われる。
- <sup>(16)</sup> 名嘉真(1983)では次のような順行同化が示されている。
- \*atsiʃa:m → attʃa:m 《熱い》
- \*kalʃa:m → kalla:m 《軽い》 (名嘉真1992:605)
- <sup>(17)</sup> 同じく宮古方言に属する大神島では、[ffa] (草)、[ffu:] (葉)のような順行同化が見られている(加治工1977)。多良間方言でこれらの語は、それぞれ[fuʃa]、[fuʃul]である。
- <sup>(18)</sup> 首里方言ではnaNdurusaNと言い、これらは同系統の語であると考えてよいだろう。くしなやかであるさまを表す、古典語のナビヤカ(ナビラカ)に由来するか。
- <sup>(19)</sup> 但し[kaffasi] (隠す)については、3-1の(1)/qfV<kV-r-V/のタイプの変化が想定でき

る[kaffil] (隠れる \* < [kakuri]) がそれに先立つものであるならば、類推によるとするのは不適切だろう。

# 参考文献 (50音順)

- 加治工真一 (1977) 「音韻」 (『琉球の方言宮古大神島』法政大学沖縄文化研究所)
- 狩俣 繁久 (1997) 「宮古方言」 (亀井孝他編『日本列島の言語』三省堂)
- かりまたしげひさ (2000) 「多良間方言の系譜-多良間方言を歴史方言学的観点からみる-」 (『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』琉球大学法文学部)
- 金田一春彦 (1958) 「撥ねる音・詰める音」 (『国語と国文学』35-6 東京大学国語国文学会)
- \* 金田一 (1967) 『日本語音韻の研究』 東京堂出版 所収
- 登野城ルリ子 (2002) 「石垣方言名詞の格の用法について」 (『国文学解釈と鑑賞』67-7)
- 長浜 数子 (1978) 「多良間村塩川方言の音韻」 (『沖縄県文化財調査報告書第12集多良間島の方言琉球方言緊急調査第3集』沖縄県教育委員会)
- 仲原 穰 (2003) 「石垣島宮良方言の音韻研究序説」 (『琉球の方言』27 法政大学沖縄文化研究所)
- 名嘉真三成 (1983) 「琉球宮古方言の形容詞」 (『琉球大学教育学部紀要』26)
- (1992) 『琉球方言の古層』 第一書房
- \* 名嘉真1983は名嘉真1992に所収
- 中本 正智 (1976) 『琉球方言音韻の研究』 法政大学出版局
- 平山 輝男 (1983) 『琉球宮古諸島方言基礎語彙の総合的研究』 桜楓社
- 山崎 馨 (1963) 「日本語の形容詞の起源について」 (『美夫君志』6)
- \* 山崎 (1992) 『形容詞助動詞の研究』 和泉書院 所収